

**浜名湖近傍の名勝庭園の手法を用いた作庭**  
—しずおか国際園芸博覧会「遠江の庭」出展庭園—

**関西剛康**

造園計画研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

**Garden production based on the method for the Meisho Garden  
in the vicinity of the Lake Hamana  
— "Garden of Totoumi" displayed at Shizuoka International  
Garden and Horticulture Exhibition—**

**Takayasu Sekinishi**

*Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,  
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

南九州大学研究報告 40A 別刷

*Reprinted from*

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY  
40A, 2010

# 浜名湖近傍の名勝庭園の手法を用いた作庭 —しずおか国際園芸博覧会「遠江の庭」出展庭園—

関西剛康

造園計画研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

## Garden production based on the method for the Meisho Garden in the vicinity of the Lake Hamana — "Garden of Totoumi" displayed at Shizuoka International Garden and Horticulture Exhibition—

Takayasu Sekinishi

*Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,  
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

For 187 days from Apr. 8 to Oct. 11, 2004, Shizuoka International Garden and Horticulture Exhibition, Pacific Flora 2004 was held at Hamanako Garden Park in Shizuoka Prefecture. Under the theme of garden culture expressed with flowers and greenery, a lot of gardens were exhibited, to achieve an attractive new-style exhibition of splendid gardens nurtured in the local culture and history in cooperation with 24 countries around the world.

This is a case study regarding the background and meanings of the production of "Garden of Totoumi," which is one of the gardens displayed at the exhibition. "Garden of Totoumi" was produced while considering the reason why the exhibition was held around the Lake Hamana in Shizuoka Prefecture and studying the characteristics of the Japanese garden designated as the Meisho Garden in the vicinity of the Lake Hamana, and using its traditional garden techniques. By researching Japanese gardens around the Lake Hamana and extracting the techniques for rendering local atmosphere and nature, excellent garden beauty could be created even in small space for a garden.

**Key words:** International Garden and Horticulture Exhibition, Displayed garden, Lake Hamana, Meisyo garden, Traditional techniques.

### 1. はじめに

平成16(2004)年4月8日から10月11日までの187日間、静岡県浜松市村楠町の浜名湖ガーデンパーク約56haを会場に、日本で3回目の国際園芸博覧会に承認された「しずおか国際園芸博覧会パシフィックフローラ2004」(通称「浜名湖花博」:以下浜名湖花博)が開催された<sup>1)</sup>。「花・緑・水・新たな暮らしの創造」をテーマに、世界24の国と地域の文化や歴史の中で育まれた見事な国際庭園をはじめ、ともに創り上げていく新しいスタイルの魅力あふれる博覧会を目指して、300以上の展示庭園等も出展された。

その出展庭園のひとつである「遠江<sup>2)</sup>の庭」の作庭

については、著者が静岡県浜名湖で開催され場所性を踏まえ、この周辺地域にある優れた日本庭園文化を世界に紹介する意味を考慮した。そのため、その浜名湖近傍に位置する名勝庭園として指定されている伝統的な日本庭園の景観構成の特性を調査・研究した上で、その風土や自然を表現した伝統手法や技法を抽出し、それを基調とする日本庭園の作庭を行った。

そもそも日本庭園の景観構成を対象とした研究はまだまだ発展途中にある。その中で浜名湖近傍の日本庭園の景観構成を探求した研究は数少ない。調査・研究では研究成果が数少ないことを踏まえた上で、浜名湖近傍の日本庭園の景観構成の特性に関して探求している。そして作庭の上では、調査・研究において分析した伝統的な景観誘導手法を現在の狭小庭園にも応用で

きるような観点で再構成しており、日本庭園の美的景観構成に対して少なからず進展させる試みでもある。

本論は、この浜名湖花博に出展した展示庭園「遠江の庭」に関して、その基本計画を作成するための調査・研究での成果と、作庭経緯とともにその意義に関する論述からなる。

## 2. 出展庭園「遠江の庭」の完成までの経緯

平成14（2002）年11月頃、著者に財団法人国際園芸博覧会協会から屋外展示庭園の出展依頼があった。この依頼を受けて平成15（2003）年4月15日に展示庭園デザイン説明会、その後に基本計画案を検討するための調査・研究をした上で、同年6月27日に庭園実施計画書を提出した。この展示庭園は「遠江の庭」と題して、この限られた展示庭園の中で、静岡県浜名湖近傍の風土に根ざした伝統技術を用いた日本庭園を表現することをテーマに、作庭を試みることにした。

実際の施工は、第1期工事の造成・石組施工を同年10月4～13日の間で行い、途中に浜名湖花博の会場整備のため中断し、第2期工事の植栽施工・仕上げを平成16年3月29～4月2日の間で行った。最終的な手直しを同年4月3、4日で終了し完成となった。同年4月7日の内覧会を初めに公開され、同年4月8日から同年10月11日まで展示された（表1）。

この屋外展示庭園は「緑の里」、「水の園」、「花の街」の3つの区域に分類されており、その各区域にテーマごとの展示庭園エリアが設定されていた。著者はその「緑の里」の中の「和の庭」エリアに出展することとなった。「和の庭」エリアの展示面積は、50m<sup>2</sup>（幅10m×奥行5m）の狭い計画地であり、前面園路は幅員5.0mであった。計画地は、その前面園路に向かって約1.0mの高低差で傾斜していた。また、背後には幅約6.0mの防潮林が新植されており、周辺にはアネモネ、ブランダ、ヘメロカリス、ギボウシ、ヒルザキツキミソウ等の地被が植栽されていた。

## 3. 浜名湖近傍の伝統的日本庭園の特性

基本計画案を検討するために、以下の対象と方法で、浜名湖近傍の日本庭園の伝統手法について調査・研究を行った。

### (1) 対象と方法

伝統的な日本庭園の特性を把握するための調査対象は、優れた手法や技法で表現された庭園である必要があるため、浜名湖近傍の国または県指定名勝として登録されている日本庭園を調査・研究対象とした。この浜名湖近傍には国指定名勝の「龍潭寺庭園」（以下龍潭寺）と、県指定名勝の「摩訶耶寺庭園」（以下摩訶耶寺）、「大福寺庭園」（以下大福寺）、「長楽寺庭園」（以下長楽寺）の3庭園があった。また平成6（1994）年に秀逸な枯山水庭園として新発見され、まだ当時は引佐町指定名勝（平成20（2008）年11月11日に県指定

表1. 「遠江の庭」の完成までの経緯

年 月	作業項目
平成14年11月頃	出展依頼の連絡
平成15年4月15日	展示庭園デザイン説明会
平成15年5月～6月頃	5つの名勝庭園の調査・研究
平成15年6月27日	庭園出展実施計画書の提出
平成15年8月12日	出展契約の締結
平成15年10月10日	出展庭園工事の許可申請の提出
平成15年10月中旬	施工説明会
平成15年10月4～13日	第1期工事（造成・石組施工）
平成15年12月～16年2月頃	園内園路工事期間
平成16年3月29日～4月2日	第2期工事（植栽施工）
平成16年4月3、4日	最終手直し
平成16年4月7日	内覧会
平成16年4月8日	浜名湖花博の開会
平成16年10月11日	浜名湖花博の閉会
平成16年10月12日	庭園撤去



図1. 浜名湖近傍の指定名勝庭園位置図

名勝に登録)ではあったが、著者らが調査し、平成12（2000）年に研究発表<sup>3)</sup>した優れた庭園構成と意匠を有する「実相寺庭園」（以下実相寺）を含めた5庭園を対象とした（図1、表2、3）。

調査方法は、まず5つの名勝庭園の庭園様式、景観構成および意匠等について調査し、その形態から各内容の相互の類似性、関連性を読み取り、その景観構成から作庭手法を明らかにした。

### (2) 景観特性に関する総合考察

5つの名勝庭園の調査から把握した主な内容を表4に記した。この調査から各庭園より抽出した景観構成の特性としては以下のことが言えた。

#### 1) 庭園様式と観賞位置

まずは全体的な庭園様式について、龍潭寺（写真1、2）、摩訶耶寺（写真3、4）、長楽寺（写真5）、大福寺

表2. 浜名湖近傍の対象とした指定名勝庭園

庭園名	作庭年代	指定名	指定時期	所在地
龍潭寺庭園	江戸時代初期	国指定名勝	昭和11年9月3日	静岡県浜松市北区引佐町井伊谷1989
摩訶耶寺庭園	平安時代末期	県指定名勝	昭和52年3月18日	静岡県浜松市北区三ヶ日町摩訶耶421
大福寺庭園	江戸時代初期	県指定名勝	昭和52年3月18日	静岡県浜松市三ヶ日町福長220
長楽寺庭園	江戸時代初期	県指定名勝	昭和61年3月22日	静岡県浜松市気賀7953-1
実相寺庭園	江戸時代初期	県指定名勝	平成20年11月11日	静岡県浜松市北区引佐町金指1371

表3. 浜名湖近傍の指定名勝庭園の寺院略史

龍潭寺庭園	<p>天平5（733）年に行基の開創により「八幡山地蔵寺」と称されていた。井伊家初代の井伊共保が赤子の時に井伊家の菩提寺となり、寛治7（1093）年の共保83歳で埋葬された時にその法号から「自浄寺」と改称した。延元（1336）年に南朝擁立のため後醍醐天皇の第2皇子の宗良親王を迎えたが、元中2（1385）年に死去したので法号の冷湛寺殿に因んで「冷湛寺」と改称した。次いで20代直平は延徳元（1484）年信州松源寺の文叔和尚を請じて天台宗を禅宗に改宗し、永正4（1507）年には法嗣である黙宗和尚を開山に「龍泰寺」と命名した。22代直盛の時に造営に努め寺勢は増したものの、永禄3（1560）年の桶狭間の合戦で戦死した直盛の法号から「万松山龍潭寺」と改称したが、兵火で諸堂全焼、天正14（1586）年に徳川家康、天正18（1590）年には豊臣秀吉の喜捨を受け、慶長8（1603）年家康の寺領96石余をもって再興した。しかし寛永年間（1624～43）、再三の焼失にあう。現存する建築物は延宝4（1676）年の再建時のものであり、本庭園もその直後に作庭した江戸時代初期のものとしてされている。</p>
摩訶耶寺庭園	<p>『寺伝』では神亀3（726）年、行基の草創とあるが、延宝7（1679）年の『摩訶耶寺縁起覚書』に現在地の北で「新達寺」と号し、兵火によって平安中期の正暦年間（990～994）千燈峯に移り「真宣寺」と称したとある。やがて衰退し現在地に再々建立され「大乘山摩訶耶寺」として500余年とあり、平安末期の平家全盛の治承年間（1177～1180）にあたる。上古以来、この地は出雲系氏族が住み、平安中期にはその子孫の浜名県主がこのあたりの伊勢神宮神領である神戸の荘を所管、その上司である総領司には藤原家一門の大中臣氏が浜名神戸司となって栄えた（『神宮文庫浜名神戸検昌記』）。この庭園はその当時の邸館のものであり、摩訶耶寺は彼らの援助によって隣接地へ移建されたものと考えられている。次いで鎌倉時代の弘安年間（1278～1288）頃の大福寺と本寺末寺の論争で僧兵乱入騒ぎが頻発して大きな被害を受けた。天正元年（1573）の三方原で徳川家康を破った武田信玄は勢いに乗じてこの寺を焼き払ったものの、今川・豊臣・徳川家から代々寺領75石を賜り、江戸初期の寛永9（1632）年には現存する総檜造り入母屋5間4間の本堂が再建されている。この庭園の発見は比較的新しく、昭和32（1957）年境内の竹林清掃中に発見、昭和42（1967）年秋、当時工事中であった東名高速道路の関係者に石組の真価を認められ、昭和43（1968）年6月から7月の合同調査によって発掘復元された。作庭年代については、地割や石組の特徴から平安時代末期から鎌倉時代初期と推測されている。</p>
大福寺庭園	<p>貞観5（875）年、園城寺の教侍上人がこの寺の前身である「幡教寺」を現在地の東北にある鳳来山（扇山）に開創したことに始まる。承元4（1207）年、伊勢神領司の大中臣朝臣時定がこの地に移建。寺領250町歩を寄進して自らの菩提寺となし、「大福寺」と改称して土御門天皇から勅額を賜っている（『大中臣時定施入状案』）。明和5（1768）年に全焼するが、安永5（1776）年、18世の秀尊によって再建されたが、この時の作庭に関する文献は見当たらない。庭園の成立について『寺伝』では室町時代に浄土を意味する庭園の存在を想起しており、また茶人の山田宗偏（1627-1708）が来住し愛好した庭園であるとしている。</p>
長楽寺庭園	<p>平安時代初期の大同年間（806～810）に弘法大師によって開かれたといわれ、この寺院の北側に陽光を受けて光る巨岩を霊地と見て御堂を建立したことに始まる。のちに今川、徳川の信仰を集め、巨岩の麓に七堂迦藍が建ち並び寺領25haをもって繁盛した。江戸時代初期の作庭とされる庭園は「満点星（どうだん）の庭」と呼ばれ、4月中旬～6月上旬にはその樹齢300年、200余株のドウダンツツジが開く。また隠元禅師の高弟、独湛禅師の筆である「長楽寺」の扁額が架けられている山門や土塀は室町時代の作とされ、静岡県に現存する梵鐘の中で2番目に古い梵鐘もある。昭和22（1947）年の農地解放で寺領を失い一時荒廃し、この時収入の道を失った寺が、雑木林を開いて実をとるために植えた梅が毎年春になると白、紅の花をつけ、辺りに芳香を漂わせている。</p>
実相寺庭園	<p>実相寺の創立について『松源山実相寺御由緒』によると、金指近藤家の屋敷北側の稲荷山南麓（現引佐高校の裏）には実相寺の前身である「新正院」があったと記されている。そもそも新正院は、嘉暦元（1326）年に方広寺開山無文元選の法嗣悦翁禅師が開創した寺院であった。この新正院を寛永5年（1628）に、貞用が現在地に移設したのが「実相寺」の始まりとされている。新正院の移設は、近藤貞用の父の墓が金指の東にあたる都田村の竜洞院にあり、そこは度々水害を受けることが一つの理由と、もう一つがこの地が近藤氏の領地でなかったために将来を憂いでいたことによる。貞用は、父である近藤季用の17回忌の際に、新正院と御廟所を現在の地に移転した。移転した御廟所は高さ9尺、周囲15～6間余の土盛りをした上に新たに造成した五輪塔を建立したものであった。この移転時に新正院の名称は、季用の法名「実相成參居士」ととって、「実相寺」と改称したとされている。そして万治3年（1660）には、貞用の母である寒松院の墓が同台に建てられており、寒松院の法号に因んで山号も松源山と改め、ここに「松源山実相寺」という山号・寺号が成立した。また実相寺の本寺は臨済宗方広寺であるため、貞用は京都大徳寺の住持琢源に山号寺号の揮毫をしてもらっている。これらにより実相寺は、金指近藤家の祖廟のある寺院となった経緯が知られる。作庭年代については、明確な史料はないが本堂再建時期や地割、石組の特徴から江戸時代初期と推測されている。</p>

表4. 対象庭園の内容

龍潭寺庭園	庭園様式 観賞方法 観賞位置	池泉築山式。 観賞式。 基本的には方丈建築から観賞する（ただし池泉手前中央に礼拝石あり）。
	庭園構成 と意匠	庭園は方丈の北庭にあたり、建築と築山とに挟まれた東西に細長い敷地に「龍池」、「心字池」とも称される池泉を手前に細長く穿ち、築山を造成している。築山は優美な稜線をもつ5つの峰をもつ連山式であり、谷筋に3つの「枯滝石組」を配石している。その築山と石組の合間に彩りを添えるサツキツツジの刈込群がある。池泉の右端入江前の小石敷内にある「鶴石組」の主石である「羽石」と、庭園左側の出島にある主石との2石は「仁王石」とも称され、共に庭園景観の視線左右を引き締めている。庭園の中央正面軸の池際には「礼拝石」が、築山山頂付近には「三尊石組」が遠山石風に配石され、景観構成上の役割を果たしている。
摩訶耶寺庭園	庭園様式 観賞方法 観賞位置	池泉築山式。 観賞式。 池泉の西側の邸館跡より観賞する。
	庭園構成 と意匠	この庭は寺院敷地の西南に位置し、池泉中央に「中島」を有する。その背後遙か東南の「からくりの滝」を借景とし、中島と遠山風の連山形式の築山とを関連づけている。池泉の手前岸は、左右2つの「出島（岬）」がある。中島は「鶴島」の手法が見られ、これを中心に組んだ三重五重の石組護岸は重厚で迫力がある。池泉西南側には「亀石組」があり、仙人の住む蓬莱山も意味して組まれている。築山の南背後にはほとんど石組がなく、観賞位置の裏側で見えないので省略されたものか、後世の荒廃かは不明である。池泉の対岸、東から北に連なる連山式の築山は7つの峰を数え、中でも目を引く意匠は、東と東北の築山上に見える2組の「三尊石組」である。これらの連山式築山は大和絵のように穏やかで、山裾は池泉に出張り、横石風の「三尊石組」手法を巧みに連続した護岸は、二重五重と積み重ねられて豪華そのものである。
大福寺庭園	庭園様式 観賞方法 観賞位置	池泉築山式。 池泉観賞・回遊式。 本堂と築山・池泉を回遊する園路。
	庭園構成 と意匠	この庭園は方丈の西面にあり、園路は築山の下や「福助池」と称する池泉周辺を回遊出来るようになってはいるが、形式だけのもので本格的な池泉回遊式ではない。池泉は摩訶耶寺庭園と類似して手前岸の左右から「出島」を張出して、池面に奥行きを創り出しており、北出島の中央には傑出した「二石組」がある。この池泉の護岸石の多くは2段積である。築山は自然の山麓を利用しており、水源には北側や南西隅の深い入江の奥から流入する谷川、更に正面右側からも山水を採り入れて、その中腹には「滝石組」を配している。また滝壺に水分石、滝口には遠山石風の大きな石が背後を支える。滝前の入江には簡単な板橋が架けられて、左側の板橋の橋元には「袂石」の立石がある。その築山上部と入江を挟んだ東南下側に「須弥山石組」が2組あり、この他にも「三尊石組」が築山に3組と、南出島（岬）の根元近くのもの合わせて4組ある。
長楽寺庭園	庭園様式 観賞方法 観賞位置	池泉築山式。 池泉観賞・回遊式。 本堂と築山・池泉を回遊する園路（ただし池泉手前中央に礼拝石あり）。
	庭園構成 と意匠	この庭園は「満天星（どうだん）の庭」として、「富幕山」と称する築山には、樹齢300年の200株余のドウダンツツジの群植を見ることが出来る。また築山には十三重塔を配しており、北側の山並が借景として生かされている。本堂手前に池泉を有し、手前護岸には「座禅石」が据えられている。護岸や築山に組まれている景石は地元産出のチャート系の石材が使用されている。景観位置は本堂からの座観が基本であるが、回遊できる園路も有している。
実相寺庭園	庭園様式 観賞方法 観賞位置	池泉築山式。 観賞式。 本堂と観音堂から観賞できるが、主には礼拝石。
	庭園構成 と意匠	庭園は本堂に対して東庭、そして観音堂の北庭となる。庭園意匠は、庭園の北側面に築山の三連山が設けられ、また築山頂上付近の「遠山石」から築山裾にかけて石組が施されている。その築山法面中央に、豪快で数段の「枯滝石組」がある。また築山の庭園景観を引き締める立石が、左右両側に据えられており、龍潭寺庭園の「仁王石」を連想させる役石でもある。そして南西側の前面は「枯池」となり、築山に正対する位置に「礼拝石」であろう平石が据えられている。この庭園手前の「礼拝石」から枯池を越えて築山中央の枯滝組に正対する視線を庭園景観の主軸と考える。勿論、建築内部からの景観として、本堂や観音堂からの座観式と考えられるような景観構成ともなっているが、純粋な座観式庭園ではなく、本堂と観音堂との間に降り立った位置から観賞すると考えられる。庭園の南東側、本堂からは東向正面の庭園景観には、見事な巨石を中心とした石組がある。この巨石を羽石とすると、この石組は「鶴石組」とも考えられる。

(写真6)の4庭園は池泉築山式の庭園様式であり、実相寺(写真7, 8)は築山式枯山水様式であった。ただ5庭園とも実際に水が有るか無いかの差であるが、

基本的に「築山景観」と「池泉(枯池)景観」の具象的な意匠を有する地割となっている「縮景庭園」の様式といえる。

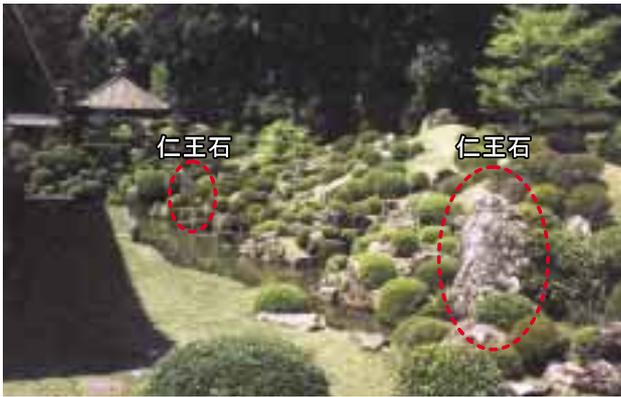


写真1. 龍潭寺庭園



写真5. 長楽寺庭園



写真2. 龍潭寺庭園



写真6. 大福寺庭園



写真3. 摩訶耶寺庭園



写真7. 実相寺庭園



写真4. 摩訶耶寺庭園



写真8. 実相寺庭園

表5. 景観構成の項目

景観区分	構成要素	庭園意匠
遠景	背景の森林の緑, 借景	森林, 山並等
中景	連山式築山, 優美な稜線	枯滝石組, 三尊石組, 須弥山石組, 遠山石等
近景	池泉 (枯池), 水平面	出島, 仁王石, 鶴島, 亀島等

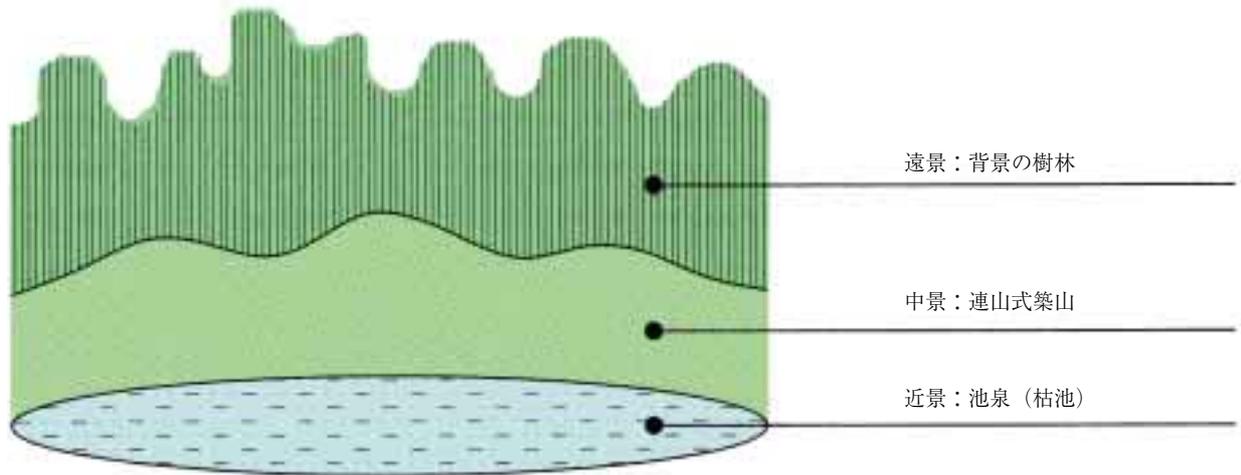


図2. 浜名湖近傍の名勝庭園の景観構成モデル

次に観賞位置については、比較的規模の大きい敷地を持つ長楽寺と大福寺の2庭園は築山や池泉周辺に簡易的な園路を廻しているが、基本的に5庭園とも方丈(龍潭寺), 本堂(大福寺, 長楽寺, 実相寺), 邸館跡(摩訶耶寺), 観音堂(実相寺)の建築物ないしは池泉(枯池)中央手前の礼拝石(龍潭寺, 実相寺)等の定位置からの観賞式の景観構成が基本であった。つまり、これら建築物や礼拝石を観賞位置に、縮景景観をある一定の方向から眺望する構成といえる。

## 2) 景観構成における地割の特性

次に地割については、まず5庭園とも正面に連山式築山を有していた。これら5庭園の連山式築山は3つ以上の峰を有し、かつ峰の稜線は穏やかで優美な曲線であった。

この連山式築山の造成方法は、大福寺, 長楽寺の2庭園の場合には、庭園背後の山地斜面を利用した築山となっていた。しかし龍潭寺, 摩訶耶寺の2庭園の場合には、池泉の掘削土を利用した築山となっていた。また実相寺の場合には、立地場所が丘陵地の山頂付近であり、その寺院建立の造成に際して発生した土盛りとも考えられるが、基本は池泉のない枯山水であり、すぐ背後に山地斜面がないにもかかわらず、地表から約3m以上になるまでの高さをもつ盛土造成の築山をわざわざ配していた。

この正面に配した連山式築山の景観構成における特性は、高さのある築山の稜線を観賞位置からほぼ明確に観賞できることによって、峰越しに築山背後の樹林がその稜線によって景観的にトリミングされ、背景として浮かび上がることで遠近感を演出していると考察する。つまり稜線によってトリミングされた「背景の

樹林」の景観を「遠景」、屏風のように立ち聳える「連山式築山」を「中景」、手前の静寂感のある水平面の「池泉(枯池)景観」を「近景」とする3つの景観(表5, 図2)によって構成されている。

そもそも日本庭園には、庭園外景観を遠景や借景として取り込む庭園手法の存在は認知されている。例えば象徴的枯山水の方丈庭園ではあるが、京都市の円通寺庭園(写真9)は生垣で、正伝寺庭園(写真10)は土堀により共に比叡山の景観をトリミングすることで借景としての効果を増している<sup>4)</sup>。そして、この浜名湖近傍の5庭園にあるような連山式築山は、熊本市の水前寺成就園庭園の富士峰を模した芝生築山の連山(写真11)や、東京都の小石川後楽園のオカメザサの小廬山(写真12)等にも配されている<sup>5)</sup>。しかし、龍潭寺や摩訶耶寺, 実相寺のような比較的囲まれた敷地に、穏やかで優美な稜線を有する芝生築山は他地方ではあまり見られない。

5庭園はこの連山式築山により、山林に囲まれた場所等であっても縮景庭園として遠近感のある深山幽谷の景観を創出していると考察する。

## 3) 景観構成における庭園意匠の特性

前述では、5庭園の遠近感を演出する景観構成について、基本的な3景観(遠景, 中景, 近景)の地割に関する考察をしたが、更にその景観構成を補完する役割となる庭園意匠について考察を加える。

5庭園には、表6に見られるような庭園意匠が配されている。これらの庭園意匠は須弥山石組, 枯滝石組, 三尊石組, 鶴石組, 亀石組, 礼拝石, 出島等のように他地方の伝統庭園にも応用されている。しかし他地方にはなく、この地域特有の意匠もある。そ



写真9. 円通寺庭園



写真11. 水前寺成就園庭園



写真10. 正伝寺庭園



写真12. 小石川後樂園

表6. 5つの名勝庭園の庭園意匠

	庭園意匠名	龍潭寺庭園	摩訶耶寺庭園	大福寺庭園	長楽寺庭園	実相寺庭園	備考	
築山付近	須弥山石組			○			守護石含む	
	三尊石組	○	○	○				
	遠山石組					○		
	滝石組			○				
	枯滝石組	○	○			○		
池泉または枯池周辺	仁王石	○				○	亀出島含む	
	出島	○	○	○				
	鶴島		○					
	鶴石組	○				○		
	亀石組		○					
	蓬莱岩島	○						
	二石組			○				
	袂石			○				板橋の橋元
	船着石	○						
	礼拝石	○				○		○
板橋			○					

これは龍潭寺と実相時の2庭園にみられる「仁王石」(写真1, 7)である。この役石は「仁王」の文字通りに、正面景観の両端の築山左右裾に位置するように配石された立石である。景観構成においては、この

仁王石が庭園景観の両端を引き締める額縁効果のような景観誘導手法を発揮している。また、この2石の仁王石を底辺にして、連山式築山の中央峰付近に配している三尊石組や遠山石に向かって三角形構成

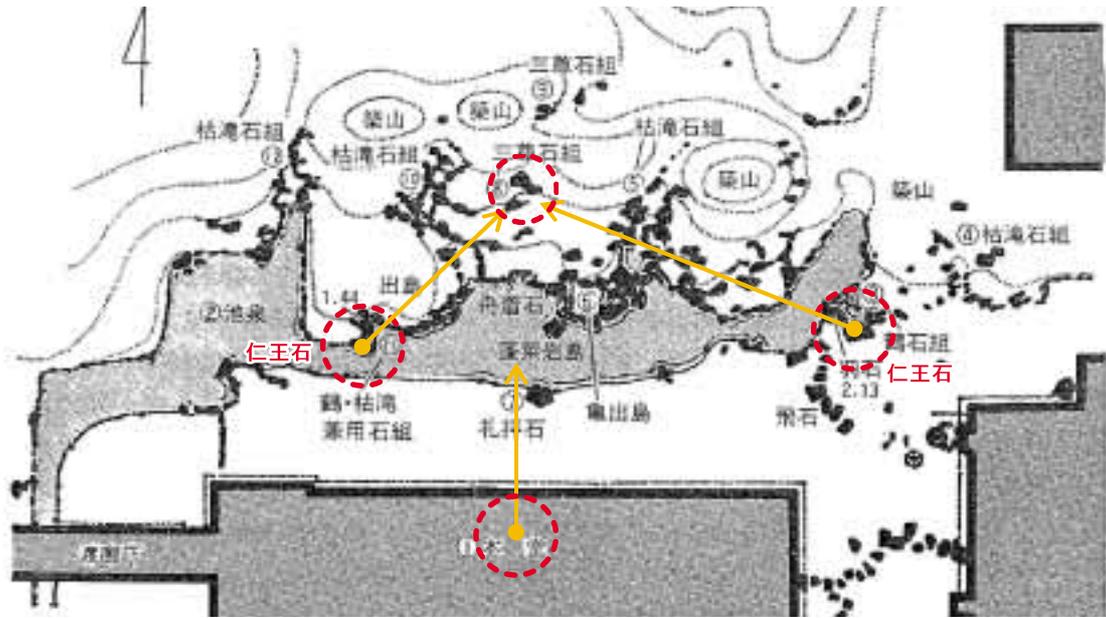


図3. 龍潭寺庭園平面図（河原武敏著『名園のみどころ』に加筆）

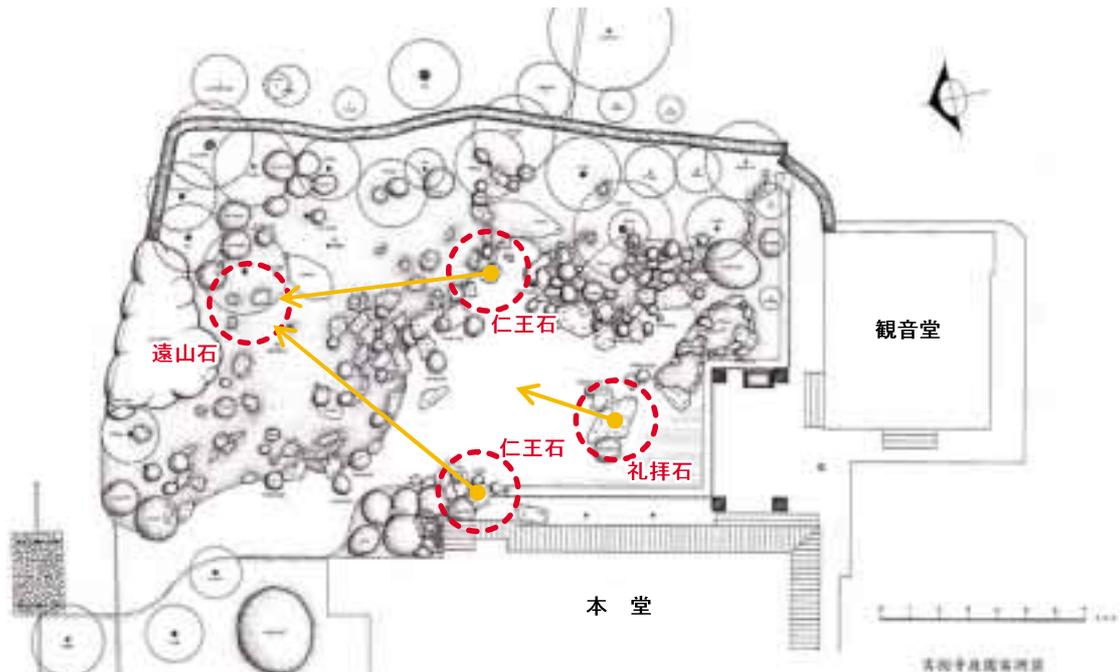


図4. 実相寺庭園平面図

（図3，4）を抽出することができる。このことから日本的な奥行に向かって収斂する景観構成を構築することで遠近感を演出していると考察する。

なぜ、この石組意匠による三角形構成が、遠近感を演出するかについての解説を後述する。まずは西洋的な科学的遠近法とは異なるが、奥側に向かって収斂して行くことで日本にも遠近感を演出する景観誘導手法は存在する。例えば、桂離宮の御興寄前庭の「く字形飛石」の配石を先細りにすることで奥行きを

深く<sup>6)</sup>、逆に新御殿入側縁の榑板の幅が先へ行くほど広がっていることで実際より近くに視認させている<sup>7)</sup>。また日本庭園では、龍安寺庭園の油土堀の南東角が傾斜しており、かつ西面の方は南側に向かって徐々に低くなっている。そのために実際より広角が強調されるために広く視認されている。

この奥側に向かって先細りする景観誘導手法を、日本庭園の石組により構成されていることを江山正美は先行研究<sup>8)</sup>している。江山は京都市の大仙院庭

園（図5）が、景石の並びによる軸線によって正面の不動石に向って先細りする景観構成を発見している。この軸線は、正面の不動石に向かって収斂する景観構成となることから、庭園景観に下流から滝口へ向けて枯流れが先細りとなる景観構成を生み、それが遠近感を演出している。

この大仙院庭園の事例等の景観誘導手法の先行研究からの系統となる研究<sup>9)</sup>として、著者は同様の遠近感を創出する三角形構成を退蔵院庭園と西本願寺庭園から発見している。この研究では、退蔵院と西本願寺の2庭園の枯池護岸は凹凸になってはいるが、図6、7に図示したようにその枯池護岸の外郭を結ぶと、最も遠方にある中央立石を頂点とする三角形構成を抽出することができる。このような数少ない研究ではあるが、三角形構成による遠近感を演出する景観誘導手法の存在が、日本庭園の石組から発見されている。そのため、前述した龍潭寺と実相寺の2庭園も、2石の仁王石と築山中央峰付近の三尊石や遠山石による三角形構成によって、退蔵院と西本願寺の2庭園の枯池ほどに明確な三角形構成を表現していないにしろ、景観構成における遠近効果を発揮していると考察した。

また仁王石のような立石は、額縁効果として判別しやすい存在であるが、それほど存在感はないが、景観誘導手法として効果を発揮している庭園意匠が存在する。それは摩訶耶寺と大福寺の2庭園（図8、9）の「出島」がその役目であると考察する。景観構成において、この出島が池泉手前岸の両側に存在することで、その先の築山にある三尊石組や須弥山石組に向かってここでも三角形構成を構築していると考察した。

#### 4) 総合考察

前述の考察した内容を総合的に考察すると、5つの名勝庭園の景観構成としては、特に穏やかで優美な曲線を有する連山式築山の稜線によって峰越しにトリミングされた「背景の樹林」景観を「遠景」とし、その「連山式築山」自身の景観を「中景」に、そして手前の「池泉（枯池）」景観の水平面による広がり「近景」とする3景観は、浜名湖近傍の5つの優れた名勝庭園に共通した地割として、遠近感を演出する景観誘導手法として優れた伝統手法であった。

そして、他地方でも遠近感を演出する景観構成として存在する石組意匠等による三角形構成は、浜名湖近傍にしかない庭園意匠である築山両側裾の「仁王石」や、他地方でもある池泉手前の「出島」を底辺として、正面中央の築山中央峰付近に位置する遠山石（または三尊石組や須弥山石組）等を頂点として視線を誘導することでも遠近感を補完演出していた。

これらの庭園手法を併せて用いることで、背景が森林に阻まれたような敷地環境でも、その背後の樹林までも遠景や借景として、遠近感ある深山幽谷の趣を醸し出せるような縮景庭園の構成として高度に構築されているものと考察する。

また補足として、この穏やかな稜線を有する連山式築山とその斜面に配石した石組は、サツキツツジやドウダンツツジ等を中心とする低木を群植することにより、庭園の景趣に力強さと優美さが兼ね備

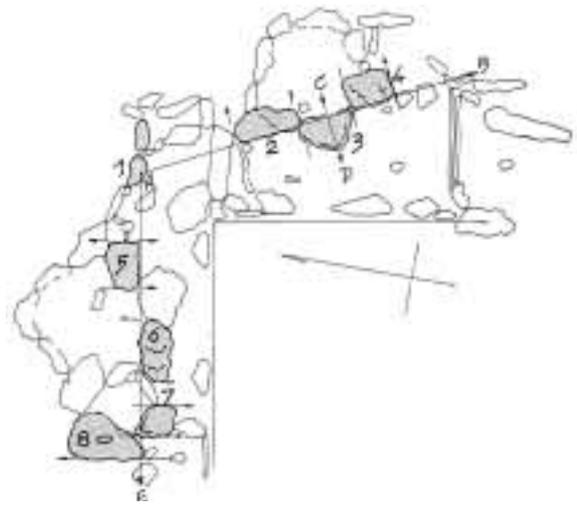


図5. 大仙院庭園の景観構成  
(江山正美『スケープテクチャ』より)

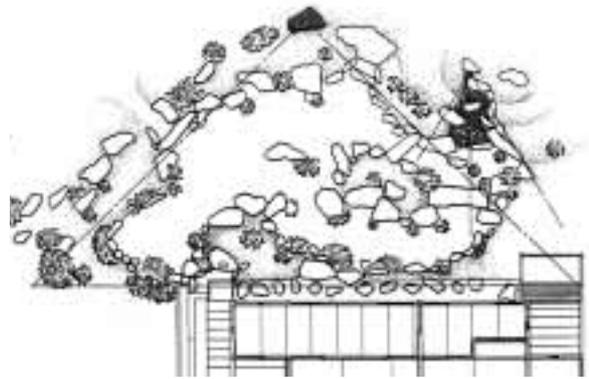


図6. 退蔵院庭園の景観構成

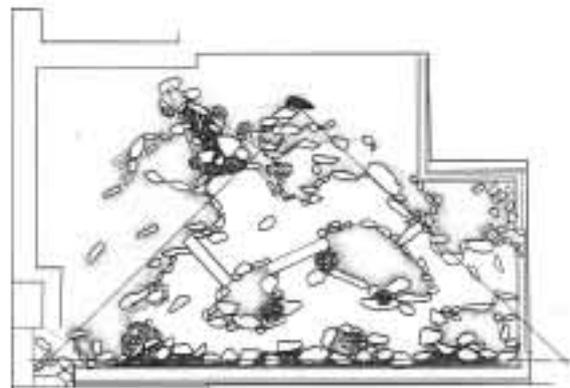


図7. 西本願寺庭園の景観構成

わって、この地方の太平洋側気候の温暖湿潤で穏やかな温かみのある風土をよく表現した景観となっていると考察する。

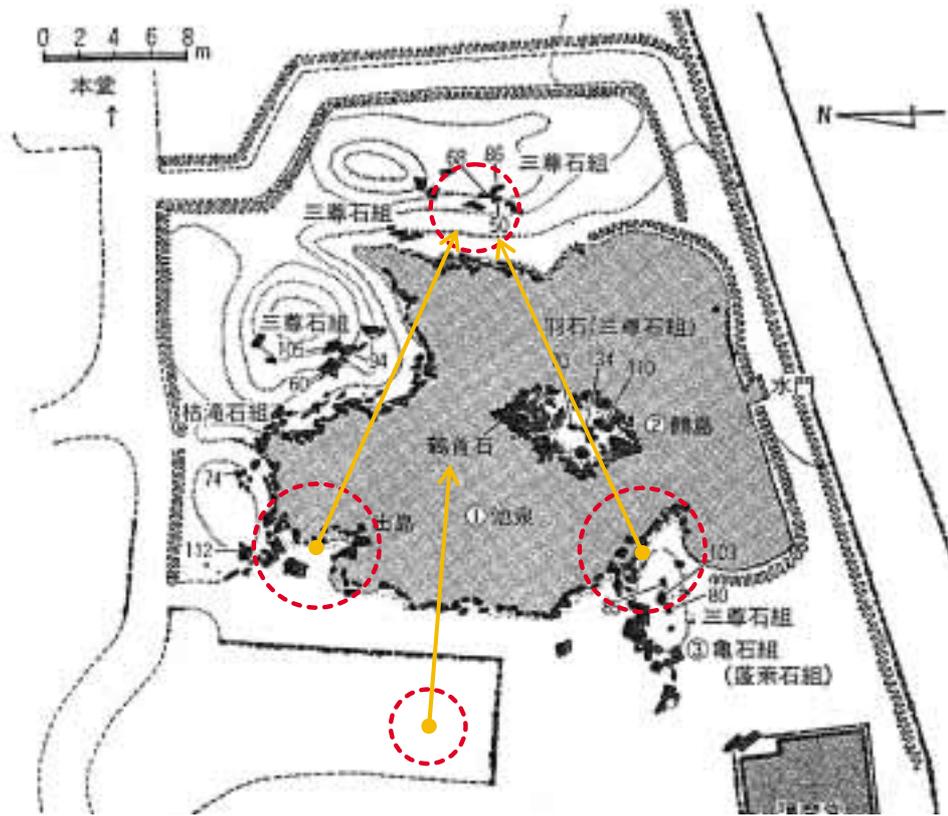


図8. 摩訶耶寺庭園平面図（河原武敏著『名園のみどころ』に加筆）

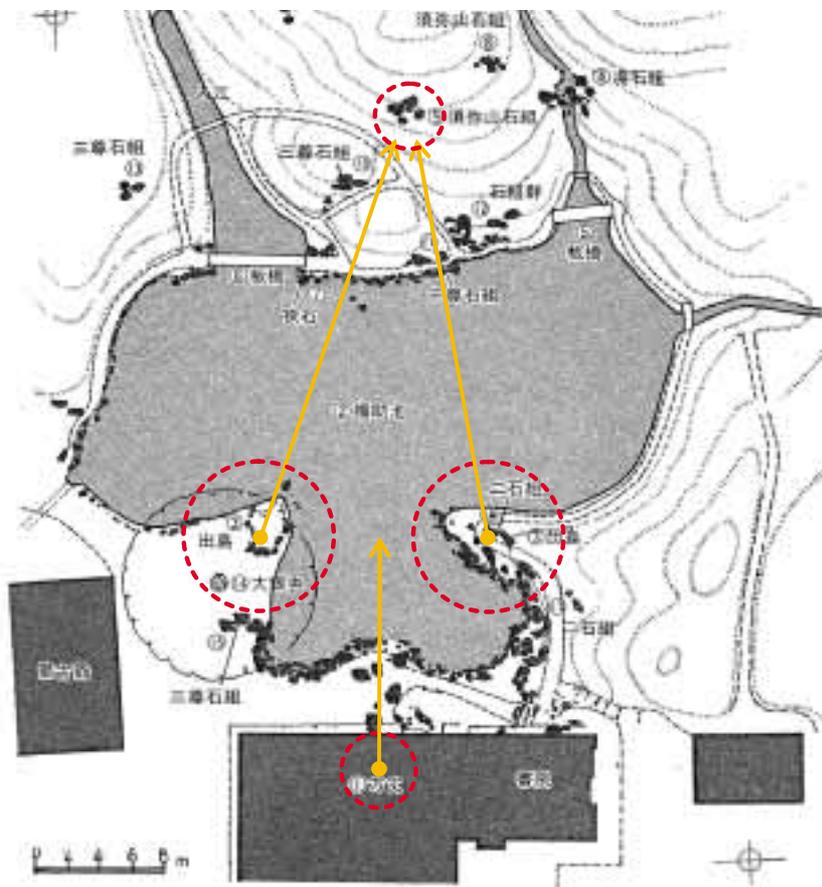


図9. 大福寺庭園平面図（河原武敏著『名園のみどころ』に加筆）

#### 4. 出展庭園「遠江の庭」の作庭

前述の5つの名勝庭園を対象に調査・研究した結果を基に、次に「遠江の庭」の基本計画を策定した。

##### (1) 基本方針

本庭園のテーマは、浜名湖で開催された国際園芸博覧会の場所性を考え、浜名湖近傍の伝統的庭園手法による深山幽谷の景趣を創出するための縮景庭園の技法を応用した日本庭園を再構築して創作することとした。そして庭園の名称を「遠江の庭」とした。

基本計画は、この浜名湖近傍の名勝庭園を凝縮し、日本の精神性を表現した枯山水様式を基本とした。本計画では敷地が狭いため、実際の池泉では制約が多くなることと、経済性、管理性にも余裕ができることを勘案してのことである。また施工は、古庭園と同じ産地の材料と伝統的技法で、高い精神性と芸術性を表現するように心掛けた。また今日的な利用も考慮して、伝統技術を用いた現在でも応用できる、優美な連山式築山の縮景庭園様式による、狭小空間を広く、雄大に演出する技法としても紹介できるようなモデルガーデンとして作庭することも配慮した。

##### (2) 基本計画

具体的な基本計画としては、以下の伝統手法を利用した庭園を提案した。

まず基本的な景観構成は、浜名湖近傍の名勝庭園の緩やかで優美な稜線をもつ連山式築山の技法を用いて、前面の枯池を「近景」とし、それと連携して枯滝石組等の庭園意匠を配する連山式築山を「中景」とし

て演出するだけでなく、更に防潮林の背景を穏やかで優美な築山の稜線を用いて逆に区切ることで生まれる「遠景」を作り出すことで、背景を「借景」として取り込むこととした。この連山式築山の技法は、周辺景観を取り込んで、狭小空間であっても、ダイナミックで雄大な景色を創出することができる手法であった。

また先の基本的な景観構成を更に、連山式築山と石組のコンビネーションによって深山幽谷の伝統的演出を図った。調査結果より、石組手法は、浜名湖近傍の伝統的縮景庭園に見られる遠山石、仁王石や枯滝石組（雄滝、雌滝）の役石を配石した。この配石の構成は、両脇に据えた立石である仁王石の2石から雄滝、雌滝へと視線が収斂しつつ、三連山中央峰付近の遠山石に誘導されることにより、実際よりも奥行感を醸しだすことに成功している。この石組による景観誘導手法は、更にこの連山式築山の手法と併せて、より深山幽谷の景趣を醸しだしている効果的な演出は、この地方の素晴らしい伝統的庭園技法といえる。これらの演出技法は、日本画における平遠式の水墨山水画に見られるような、奥深い深山幽谷の趣を演出しており、日本庭園の伝統美の奥の深さを物語っている。また出島でも同様の景観的効果が調査により検出しているため、両脇の仁王石の傍に出島を造った（図10）。

##### (3) 設計監理

著者の設計監理により、有限会社山田庭園設計の協力によって基本計画に基づいた具体的な造園施工を行った。

##### 1) 造成施工

まず造成前の現地は、前面園路に緩やかに傾斜しており、背後周辺は浜名湖から潮風対策の防潮林が植栽されて間もない状態であったが（写真13）、本庭園の



図10. 「遠江の庭」基本計画平面図



写真13. 施工前の現況写真



写真17. 植栽施工（高木・低木）



写真14. 造成施工（築山）



写真18. 植栽施工（高木・低木）



写真15. 石組施工（雄滝）

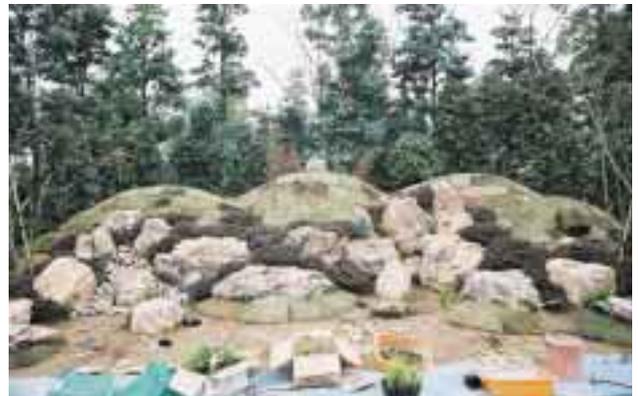


写真19. 植栽施工（ノシバ）



写真16. 石組施工（全景）



写真20. 植栽施工（地被）



写真21. 「遠江の庭」正面全景



写真22. 左方から全景



写真25. 枯滝石組（雄滝）



写真23. 右方から全景



写真26. 連山式築山に遠山石



写真24. 枯滝石組（雌滝）



写真27. 案内板周辺

表7. 植栽リスト

種別	名称	規格・形状			数量	単位	備考
		H	C	W			
高木	ヤマモミジ	3.0	株立		2	本	
高木	キンモクセイ	2.5		0.8	4	本	
高木	キンモクセイ	2.5		0.6	5	本	
高木	ウラジログシ	2.5	株立		1	本	
高木	ツバキ	2.0			1	本	白玉
高木	ツバキ	1.8			1	本	赤ワビ
高木	ツバキ	1.6			3	本	白ヤブ
高木	ツバキ	1.2			1	本	本コチャウ
高木	カクレミノ	1.8			1	本	
低木	サツキツツジ	0.4		0.4	65	株	
低木	サツキツツジ	0.3		0.3	25	株	
低木	ドウダンツツジ	0.8			3	株	
低木	ヒイラギナンテン	0.8			2	株	
低木	ヒイラギナンテン	0.5			15	株	
低木	アセビ	0.6			3	株	
低木	ヒサカキ	0.5		0.3	18	株	
地被	ツワブキ				30	Pot	
地被	セキショウ				30	Pot	
地被	シダ類				30	Pot	
地被	コウライシバ				40	足	

特徴となる連山式築山を造成するために10m<sup>3</sup>以上の盛土を搬入して2.0m以上の高さにした。前面からの景観は、防風林の樹木支柱や根元、場外景色が垣間見える状態であったため、深山幽谷の景観を創造するために、それらを隠すことも併せながら築山の高さを決めて造形を施した。また浜名湖近傍特有の緩やかな築山の曲線を意識しながらでもあった(写真14)。

## 2) 石組施工

石組に使用する景石は、本庭園の景趣を反映した材料として地元産の三ヶ日産の景石を採用した。この採用した景石は、深山幽谷の趣のある野面山石であり、本庭園の枯滝石組(雄滝, 雌滝), 遠山石, 仁王石や捨石に調和した規格形状の25石を選別した。しかし据え付けを行う際の制限としては、園路の強度の関係から車両重量制限4.0t迄だったため、景石選定も0.5~3.0t程度までのものを使用するという制限が発生した。近年では産出量が減少している三ヶ日石を使用する石組施工は、著者自らが景石の向きや根入れ等すべて指示して配石し据え付けさせた。配石は全体の景観構成と、役石と役石の調和, 氣勢等に細心の配慮をしながらも、日本庭園としての品格が求められた。特に雄滝は深山幽谷の趣を表現するために、奥深げに険しくし、それに対して雌滝は湧水が溢れるが如く対比させて表現した(写真15, 16)。

## 3) 植栽施工

植栽材料は地元の植栽販売業者の生産地や山取りの中から選別した。現場に搬入された植栽材料は、その樹形と素造成, 石組が終了した現場状況とのバランスに配慮しながら、一木一草まで配植を指示した。特に摩訶耶寺, 龍潭寺, 実相寺に見られるよう

な明瞭に浮かび上がる連山式築山の稜線が存在することで、背後の樹林を浮かび上げさせる「遠景」を構成することが出来る。そのために前方から観賞した際に、防潮林の樹木がなくて視線が抜けている築山の背後に、アセビ, ヒサカキ, ヒイラギナンテン等の低木を植栽したことで連山式築山の背後にスクリーンを配したかの如くの樹林の「遠景」が成立した。背後の防潮林と庭園が一体となる植栽施工を行うことで、狭小空間である計画地を広く見せることができた。またセキショウ・ツワブキ・シダ類の地被類に関しても、全体景観や景石とのバランスに配慮して配植した。更に両脇の仁王石に寄り添うように築山手前にヤマモミジを植栽することで、見え隠れを造り奥行感をもたせた(写真17~20, 表7)。

## 4) 仕上げ工

植栽施工の完了後には、サツキツツジの群植を雲海が連山式築山と景石の間をうねるが如く表現するために、玉物に刈り込む剪定を施した。その際に小さく刈り込んで、玉物を小さくうねることで、より全体が広く、大きく見せる工夫を施した。そして最後に清掃し、白砂を敷いて砂紋をつけて完成した。

## 5. 伝統的庭園の作庭意義

平成16(2004)年4月7日の内覧会には、完成したばかりの「遠江の庭」を御披露目することができた。完成したばかりの時は、まだ植栽も落ち着いていなかったが、同年5月上旬頃になると何年も前から存在している古庭園のような景趣を醸し出していた(写真21~27)。

今回の展示庭園は、国際園芸博覧会が静岡県浜松市村岡町の浜名湖ガーデンパークで開催されたことから、この地域で育まれた優れた日本庭園手法の紹介と、その景観誘導手法の現代への応用を考慮した作庭を行った。

初めに調査・研究を行った結果、浜名湖近傍の名勝庭園からは、それぞれに景観誘導手法として、優れた構成美を伝統技術の中から抽出できた。この手法の多くは他地方でも用いられている手法ではあるが、他地方の日本庭園よりも効果的に景観構成がなされているものと考察する。この研究結果は、縮景庭園の景観構成において、狭小空間においても効果的に景観構成できる手法として再認識する結果となった。

そして、伝統の景観誘導手法の再構築をテーマに出展した「遠江の庭」は、この地域の気候、風土の中で培われた美意識に基づいた景趣を縮景庭園として、遠近感のある深山幽谷の格調が高いながらも、明るく穏やかな雰囲気醸し出すことに成功した。

この調査・研究で得られた景観誘導手法を、さらに現在の庭園として効果が増大するように再構成に駆使した作庭がなされたことで、少なからず日本庭園の景観誘導手法の進歩に繋がるものと考察する。実際に、この景観構成の手法は、現在の狭小敷地の一般家庭でも応用の効く手法でもあり、今一度、伝統の技に振り返って、更に現在ニーズにあわせて切磋琢磨していく必要があるものと感じた。

この期間中に「遠江の庭」は、「財団法人日本造園修景協会賞「特別賞」と「社団法人日本植木協会賞「特別賞」」を頂くことができたことを、関係各位に感謝する次第である。

## 補注および引用文献

- 1) 国際園芸博覧会は、国際的なレベルで園芸生産者の共通利益を図るために開かれる博覧会である。1948年、欧州の商用園芸家たちは国際園芸家協会(AIPH= Association Internationale des Producteurs de l' Horticulture, 事務局はオランダ・ハーグ市)を設立し、最初の国際園芸博覧会を1960年オランダのロッテルダムで開催した。「国際園芸博覧会」の名称は、国際園芸家協会が承認した博覧会のみ使用できるものであり、以後、ドイツ、ベルギー、フランス、イタリア等欧州各地で定期的に開催されている。アジアでは1990年に大阪府の「国際花と緑の博覧会」を最初に、フィリピン、中国の昆明、そして2000年の兵庫県「淡路花博ジャパンフロラ2000」、2002年の韓国の安眠島で開催され、2004年の「しずおか国際園芸博覧会」で国内3度目の国際園芸博覧会の開催となる。
- 2) かつて「遠江(とおとうみ)」とは、現在の静岡県西部の令制国「遠江国」の領域に相当する地域を指した呼称であり、「遠州(えんしゅう)」とも呼ばれていた。現在の遠江地方は、太平洋(遠州灘)に面し、大井川と浜名湖の間に挟まれた地方(糸魚川静岡構造線よりも西側)を差し、俗に遠州地方と呼ばれる事も多い。
- 3) 関西剛康, 山田巨樹(2000) 実相寺庭園に関する調査報告, 日本庭園学会誌, pp.23-30.
- 4) 本中真(1997) 日本の美術 No.372 特集・借景, 至文堂, 42.
- 5) 大正時代作庭の滋賀県大津市の蘆花浅水荘庭園の場合等は、低い峰の芝生築山であるが、背景は樹林でなく琵琶湖の美しい景観やその遥か対岸の連山を借景としている。また、昭和40年代作庭の島根県安来市の足立美術館日本庭園の枯山水庭園(中根金作作庭)は、緩やかな稜線を有する芝生の連山式築山によって、遠方の山並をトリミングしており、前面に枯池を有する景観となっていることで、遠景・中景・近景を構成している(築山に点在する小松の植栽位置は、築山の稜線を隠さないように主に稜線背後に植栽されている)。あくまで仮説の域をでないが、中根は静岡県磐田市の出身であり、浜名湖近傍のこれら指定名勝庭園群に影響を受けた可能性は否定できないであろう。
- 6) 小林盛太(1972) 建築デザインの原点, 彰国社, pp.163-167.
- 7) 高橋研究室(1984) かたちのデータファイル, 彰国社, 35.
- 8) 江山正美(1984) スケープテクチュア, 鹿島出版会, pp.128-131.
- 9) 関西剛康(2006) 枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察, ランドスケープ研究 69(5): 687-690.

- 1) 国際園芸博覧会は、国際的なレベルで園芸生産者の共通利益を図るために開かれる博覧会である。1948年、欧州の商用園芸家たちは国際園芸家協会(AIPH= Association Internationale des Producteurs de l' Horticulture, 事務局はオランダ・ハーグ市)を設立し、最初の国際園芸博覧会を1960年オランダのロッテルダムで開催した。「国際園芸博覧会」の名称は、国際園芸家協会が承認した博覧会のみ使用できるものであり、以後、ドイツ、ベルギー、フランス、イタリア等欧州各地で定期的に開催さ